

# 新渡戸先生と札幌

北海道大学名誉教授

## 高倉 新一郎

新渡戸先生がカナダのバンクーバーで客死されたのは昭和8（1933）年10月15日（日本時間で16日）のこと、丁度満州事変を契機にして日米間の雲行が怪しくなり、やがて太平洋戦争に発展する危機をはらんだ時であった。早くから太平洋の懸け橋となり、日米間の友好を深めることを志し、第一次世界大戦後は国際連盟の事務次長として活躍し、辞任後は太平洋会議の重要メンバーとして全身の力を傾けておられた先生は、この情勢を失礼するに忍びず、72才の高齢にもかかわらず、日本側の理事長として活動されている最中であった。まことに惜しい事であった。

それから今年で満50年を迎える。（郷里盛岡市ではこれを機会に種々の記念事業を起し、先生を顕彰しようとしている。まことに当然のことであり、その成功を祈って止まない。

新渡戸先生は、近代日本文化形成の最も偉大な先駆者の1人であり、その活動範囲の広さ、深さ、着眼点の鋭さでは他の追従を許さない人と思っているが、それが余り大きく広すぎたためか、時によると日本の国境に生れ育ち、活動舞台も主として海外もしくは教育界という地味な方面であったためか、先生を知る人は意外にすくない。先生の生い立ちもそうであるが、先生の功績も具体的に知る人は案外にすくないように思われる。先生の著書等は数も多く、多くはわかり易く書かれている。しかも内容は高く、この著ならではと思われものであるに拘らず、全集が出たのは最近で、しかも先生の全貌には未だその途上にあるといっても過言ではない。

その中でも、明らかにされているのは先生が中央の舞台に立たれてから、すなわち京都大学教授から第一高等学校校長になられて以来のことである。その以前に先生をそこまで育てた生い立ち、すなわち盛岡時代、それに続く教養即ち札幌時代は、伝記にも深くふれられていないばかりか調べようとしてその地を訪れる人があっても、資料の整備が頗る行届いていないのである。

ことに札幌は、明治十年先生が16才の時、その前年北海道開拓の指導者を養成するために同じ目的で設立され先駆的役割を果しつつあったマサチューセッツ州立農科大学に範をとり、その学長として各声の高かったクラーク博士とその門下を迎えて開設した札幌農学校第二期生として来札し

14年卒業後も開拓使御用掛として16年職を辞して上京するまで約7年間居住し、更に明治24年母校教授として着任、41年病氣療養のため去られるまで7年間住まわれたところで、同窓・子弟・知人が多く、先生の生涯にとって忘れることの出来ない地である。時に農学校教授時代は、アメリカで結婚して伴われたメリー夫人と新家庭を持たれた地であり、ただ1人の子であり、生れると間もなく失われた遠益君を葬った地でもあり、先生にとって生涯忘れられぬ地であった。この地で先生は、多方面に亘って活躍されたのである。

本務の札幌農学校教授としては、当時の農学校は開拓使という当時の日本のもう一つの政府を思わせる位な力を持っていた役所を背景として、新しい日本を背負って立つような期待をかけられていた我国最高学府の一つから、開拓使の廃止によって北海道庁という一地方官庁の所属に墮ち、存続さえ危ぶまれる状態にあり、教育の中心であった外国人教師は邦人教師に替えられつつあった時であり、それらの状態を米国留学から帰って見た、農学校第一期卒業生であり、教師として最初の邦人校長となった佐藤昌介が、その全力を傾注し、米国で学びつつあった第二期卒業生宮部金吾・新渡戸稻造及び東京の帝国大学で学びつつあった南鷹次郎を招き、この4人を中心に挽回を図っている最中であったのである。

その佐藤昌介は、岩手県花巻の出身で新渡戸先生の先輩に当り、先生の入学当初から米国留学まで色々とは何かと面倒を見、先生が米国ジョンスホッピング大学に学び、後留學生としてドイツに学んだのも、その尽力によるものであり、先生は専門も同じく、その片腕の様な存在だった。

授業としては、農政学・植民論・農史・農学総論・経済学等当時吾国においては珍らしかった新しい農業に属する専門の講義の外に、予科の英語・倫理を担当し、更に本科のドイツ語を受持ち、その持時間は週20時間を遙かに超えていた。加ふるに予科主任、書籍館（図書館）主任、更に寄宿舎舎監教務主任、衛生委員長等を兼任し、多忙な校務に当った。

教育体制を整備し、従来の実用本位とした米国式の教育にドイツのゼミナール制をとり入れ、各専門科目に別れた実験に対するものとして農業経済科にこれを取り入れ、これを演習と唱えたのは先生の発意によるものであり、そのために

農学校においてすでに大学院に相当する研究をなし得る体制が整ったのである。明治28年文部省直轄学校となり、41年には東北帝国大学農科大学となり、やがて独立して北海道帝国大学となって、今日の北海道大学の基礎となるのはこの時に端を発したのである。その時、佐藤・新渡戸両教授によって基礎づけられた農業経済学科は我国大学における最初のものであり、第二次世界大戦後に始めて設置されるまで文科系統の学部を持たなかった北海道におけるその方面の唯一の拠点として役立った。

先生が札幌農学校卒業後興味を持たれたのは文学であり、人間社会の研究であった。それを核として先生の広範な学識が集結されていたのである。

先生は教授としての本務の外に道庁技師を兼ね、専門の知識を生かして当時北海道開拓が目前にしていた札幌附近の泥炭地の研究に力を注がれた。

泥炭地とは沼沢中に生長する草の残骸が、空気の流通が悪いのと低温のために分解がおそく、泥土に混って堆積してできた土地である。従って水位が高く、地温が低く、空気の流通が悪いばかりではなく、鉱物質に乏しく、植物養分が少なく、平地ではあるが排水・客土を施さないで農耕地としては不適当な土地である。北海道は海岸の波が荒くて川口をふさぐので、下流で溢水して沼沢を作り、大河の下流には広大な泥炭地帯が広がっていた。その面積は当時の調査で約14万ヘクタール、全道農耕適地の6分の1と計算されていた。これ等の土地は後に開拓されて水田となり、食料基地といわれる北海道米作の中心となったが、当時としては府県の湿地帯とは異なる難問を抱えていたのである。道庁では、そのため特別の泥炭地試験場を設け、明治26年からその研究に乗り出した。先生は選ばれてその指導に当たったが、ドイツで得た知識を採り入れ、本格的な科学的基礎試験場を行い、その利用の途を開いた。この試験は、寒地米作試験のために東大農学部から招かれた酒匂常明博士の米作試験場と共に、北海道の農業試験場に科学を採り入れた最初の試みであり、寒地米作の出発点となったものであった。

この仕事は先生としては専門外のような気がするが、先生は学生時代は農学を志し、技術にも明るかったので、後間もなく台湾総督府技師として台湾甘蔗の改良を行い、台湾を糖業国としたのである。

先生が道庁のためにされた大きな仕事としては、もう一つ北海道小作制度の調査があった。北海道庁は北海道の開拓には多額の資本が必要であり、従来の労力だけしか持たない貧農では到底目的が達せられないことを知って、折柄勃興しつつあった資本家を中心に置く政策に転じ、その力があると認められた者には大地積の未開地を有利な条件で払下げ、着手に当たって種々の便宜を図った。その結果多くの大農場が生まれ、忽ち広大な未開地を処分して多数の農民を移植することができたが、これらの大農場は、地主自らが機械を用いて直営するのではなく、無産の労働者を招いてこれに開墾資料を与え

もしくは貸与して土地を開墾せしめ、成功後はこれを分割して小作に付してその地代の取得を図る純然たる小作農場、従来の開墾事業の繰返しだった。従って、何人でも安価に土地を得られる制度でありながら小作人の数は極めて多く、しかも新開地地主と小作人との関係も、小作契約の内容も、府県とは著しく異なり、紛争を生じてもそれを解決するためによるべき慣習がなかった。北海道庁はこれを憂い、特別な小作法を制定して健全な農業農村の発展を図ろうとし、その調査の指導を先生に託したのである。先生は教え子を督してこれに当り、道内は勿論府県の小作契約を調査し、欧米各国の小作法を参照して「北海道小作条例草案」をまとめた。不幸上呈を見るに至らず、草案のままに終わったが、実に我国最初の小作法草案であった。

先生は実にまめな人で、自らの考えを、単に学術界ばかりにではなく一般に、全国的なものに限らず道内にも、日本語だけではなく外国語でも、原稿や講演の形で気軽に発表された。当時の農学校や札幌の新聞、雑誌を見ても、人目をひく問題には必ず先生の意見が問われ、先生は平易な、わかり易い、しかもユーモアさえ交えてこれに答えられた。先生のまとまった著書は農学校教授を辞され、静養中に生れたが、それが先生の代表的名著「武士道」及び「農業本論」となり、農学博士の学位を得られることとなったのである。その内容は部分的にこれらの発表の中に語られている。

先生の活動はそれだけではなかった。学生をことのほか愛し、日曜日には学生のために自宅でバイブルクラスを開き、学生の面倒を実によく見られた。

また学校では予科生による学芸会を組織して雑誌「薫林」を発行し、自らこれに参加して互の親睦・向上を図られた。これには論文・随想・会員の消息等の外に文藻欄があり、会員が自由に投稿し得る制度であり、その中から文学愛好者が育って行った。そしてその中から、先生離札の直前（31年6月）に刊行され、当時青年の血を湧かせ、多くの学生を引きつけた「札幌農学校」の編者群が育ったが、それは先生が明治26年直轄になった学校を紹介するために筆をとられた、英文「札幌農学校」を元にしたものであった。

先生は、学生のテキストとして、ドイツ語にはゲーテのファーストを、英語にはスキントンの「イングリッシュレテラチュア」、カーライルの「サーター・レサータス」等を使って講義された（何れも我国では珍らしいものだった。）が、該博な知識と解り易い解説は青年の心の琴線にふれ、巾広い教養を与えたばかりでなく、すくなくからぬ思想家、文章家を育て、また例えば児玉花外や木下尚江等を学生として引きつけた。札幌が文化都市として独自の歩みを歩み始めたのは最近のことに過ぎないが、その根元は明治20年代にあり、先生がその頂点に立って居られた時代だった。先生は、農学校の教育だけではなしに、広く道民にも接触して大きな影響を与えられたのである。

その中で注目すべきは、北鳴学校の経営と遠友夜学校の経営だった。

先生が帰朝された当時、北海道には中学がなく、折角道のために設けられた農学校に道民の子弟が入学するコースが出来ていなかった。元北海道庁理事官の地位にあり、当時北海道における最大唯一の企業であった炭礦鉄道会社の社長であった堀基はこれを憂い、私立中学の設立を計画して、その校長となるべき人物を探していた。そこへ先生が帰られるのを知って親しく訪ね、その就任を要請した。先生もすでに留学時代からその必要を痛感しておられたので早速承諾し、教授の傍ら自ら教壇に立ち、独特の厳しいそれでいて自由な愛情のある新しい教育を実行された。この学校は北鳴学校と呼ばれ、存続五年で道庁立の中学が出来ると、生徒の多くをこれに移して閉校した。新校、すなわち北海道一の名門校と称せられる札幌中学校、後の札幌第一中学校、今の札幌南高等学校である。北鳴学校からも札幌農学校に進み、その中心として活躍した人物を出したが、札幌中学校からも多くの英才を送り出した。ことに約30年の長きに亘って校長としてその基礎をすえ、北海道の教育界をリードした山田幸太郎校長は先生に親しく学んだ農学校卒業生であり、先生の推挙によって赴任した人であった。

北鳴学校が閉じられた後、その教師をしていた教え子で職を失うものがいた。丁度その時、敬虔なクリスチャンであった夫人の実家に引き取られ、家族同様に育て、夫人をこの上もなく愛していた一孤児が、天寿を全うして神に召され、残した遺産が夫人の手元に送られて来た。夫人からその用途の相談を受けた先生は、これもかねてから考えていた、義務教育さえ受けられぬ子弟のために無料で読み書きを教える夜学校を設立することを考え、当時生活に困って北海道に働きに来たがここでも生活に窮しドンドン底生活にあえぐ人々が集まる、札幌の東方豊平河畔に家を一軒求め、同窓の信者が相寄って建てた独立教会の会員及び教え子の力を借り、経費全額を負担して無料で子弟を教育する夜学校を開いた。勿論自らも屢々出向いて講話をした。先生独特の修養講話であった。この講話にひかれて集まる人も多かった。そして後に「遠友夜学校」と名づけられた。実に札幌における社会事業の先頭であり、北海道でも先進地道南に続く第三番目のものであった。

不幸にして先生は病に犯され、明治31年静養のため札幌を去られることになり、そして子弟や知人の切なる願いにも拘らず遂に退職され、活動の舞台は全く北海道を離れて世界に拡ることになった。しかし、先生は夜学校を見捨てることなく、農学校の同僚、学生に托して継続し、托されたもの達も先生の意志を体して事業を続けた。先生は終生校長としてその維持資金を送りつづけ、来道されたのは明治42年と昭和6年の2回にすぎなかったが、欠かさず訪ねられ、生徒に講演をされ、励ましのために種々の土産を残された。それが終生続いたのである。

夜学校は、残念なことに昭和18年社会事業であって教育機

関でないため、授業停止を命ぜられ、校舎は政府に強制借上となり、50年の記念式典を最後に法人は解散の決意をせざるを得なくなったが、関係者は全部無報酬で、有志の寄付になる維持費を集め、先生亡き後は夫人を校長に仰いで先生の意志を守り通したのである。そしてこの学校に教え、学んだ者は万を以て教えられると思うが、皆当時の恩を忘れず、学び取った道を歩んだ。まことに珍らしいことで、これこそ真の教育というものだったのだろう。

なお先生は我国における女子教育の先達であるが、夜学校においては最初から男女共学を続けて閉校に至り、また米国人スミス女史によって北鳴学校より早く始められた札幌で最も古い北星女学校にも蔭になり日向になって応援され、育てられた。

札幌と先生との関係は以上の様に極めて深い関係にある。その関係が、先生の母校であり、教授としてその発展に努力された北海道大学の同窓もしくは教会・私立学校を通じて教えを受けた人達によって育てられていた。先生が逝かれる直前までは先生に直接訓陶を受けた人々未だ健在で、好んで先生のことなどを詳細に語り、先生に関係あるものを大切に保管していた。札幌の人は何かというと先生の教えを請い世話になっていたのである。

今では先生を直接知る人は極めてすくなくなった。そして市内にも先生を偲ぶ遺跡は急激に失われ、忘れられようとしている。しかし先生が札幌農学校に入学された時に落成し、その記念写真に先生の学生姿が残り、その後学び、研究し、教鞭をとられた場所である中央講堂即ち演武場は、環境が一変し位置が多少ずらされているが、国の重要文化財として昔の姿のままに保存され、時計台と呼ばれ、札幌の文化の象徴として市民に親しまれ、先生が実習されたと思われる農場の模範舎も位置は変っているがこれも重要文化財になっている。先生に関する資料は、北大図書館に設けられた北方資料室の北大沿革史料の中に整理され、先生の寄贈にかかる新渡戸文庫と共に大切に保存されている。

先生が北大以外に残されたものとしては、遠友夜学校が建物はすでにないが、幸い土地が残ったので、市と相談し、これを青少年の施設敷地として寄付することになり、市はこれを勤労青少年センター敷地とし、その建物内に新渡戸記念室を設け、遠友夜学校関係資料を展示することにした。資料室には先生が昭和6年来校され、講話をされた後「20年後には又来るぞ」といい残し、書き残して下さった数々の教訓揮毫と共に、在りし日をしのぶ資料となっている。更に玄関前には昭和54年新渡戸先生顕彰会の手によって、校長新渡戸夫妻のレリーフを手につつましい青年像が建てられた。なお札幌市資料室でも、最近新渡戸稲造展を開催して広く資料を求めて展示し、「さっぽろ文庫」として「遠友夜学校」なる一書を刊行している。



遠友夜学校は

若き日の新渡戸 稲造が、中心となって

学校に行きたくても行けない子供たちや

社会人のために

夜の時間をさいて

男女の区別なく

無料で勉強を教えた学校でした。

遠友夜学校の「遠友」には

ふたつの想いがこめられています。

ひとつは、新渡戸 稲造の永年の夢が

萬里子夫人に遠いアメリカから届いた遺産で

実現したこと。

そしてもうひとつは、

論語の「友あり、遠方より来たる。

また楽しからずや」からでした。

遠友夜学校の教育の目標は

「学問より実行」をめざして、

学んだことを本当に身につけることに

力を注ぎました。

そしてまた、

「リンカーンに学べ」を相言葉に

思いやりをもって行動できる人づくりを

すすめました。

このような教育を支えたものは

新渡戸 稲造の

けだかい精神に共鳴した

今の北大の学生・教師たちでした。

彼らは先輩から後輩へ

代々、この理想を受けつぎ、

希望の灯をともし続けました。

遠友夜学校は

昭和19年に、その歴史を閉じました。

しかし、いまもなお

遠友夜学校の精神は

時代に先がけた

人間教育の優れた模範として

札幌の歴史に

大きな一頁をしるしています。

